三菱の庭球

三菱庭球同好会

一、三菱倶楽部本部テニスコート

三菱の庭球と云えば、戦前の庭球人なら、誰でも染井のコートを連想するであろう。染井の土地約一万坪は、大正三年九月三菱倶楽部が創設された時に茅町様特別の御厚意に依り、無償

三菱倶楽部開設当時の染井運動場風景

貸与され、又同構内にある倶楽部ハウス（建坪約百二十五坪）は、富士前町岩崎邸の一部を移築して無償譲渡されたものである。

これらは昭和廿一年本社が解体され、養和会が独立経営に至るまで、三菱丈で利用されていた。

本部庭球コートは、染井倶楽部設立以前、すでに丸ノ内（八重洲ビル敷地）に一面と深川区佐賀町に一面を有していたが、庭球愛好者に多く使用されたのは、丸ノ内のコートである。

このコートは、大正十五年八重洲ビルの新築工事が着手されるまで使用されていた。三菱倶楽部創設当時の、染井倶楽部敷地は、殆んど森

三菱倶楽部開設当時の倶楽部建物
（現在の養和会建物）

林であって、杉林が大部分を占めていた。大正四年に之等の杉林の一部を切り開いて四百米のトラック（現在の野球場）を造り、そのトラックの中に、テニスコートを一面設けた。

当時の庭球は殆んど軟式であって、正式の試合は、五回ゲームで、練習の時は、一ゲーム毎に替る為、一面のコートで間に合っていたが、その後庭球は次第に盛んになり大正五年からは、東京方面と関西方面との対抗試合が行われることになったので、在来のコートと並べて更に一面増設することにした。

慶応は大正二年に軟式から硬式に替へたが、その他は、依然として、軟式を固執していた。然し時代の波に抗しきれず、大正八年から大正十年にかけて、殆んど硬式を始めるようになった。

その結果従来の二面では到底部員の要求を満たすことが出来なくなり、更に、トラックの東側に三面増設することとなった。

大正十二年からは、新たに、H・Iカップ戦が誕生し関東、関西戦と併行して催うされることとなった。

これが動機となって庭球熱は、益々盛んになり、五面のコートでさえ不足を告げる程になってきた。これを補う為大正十四年に岩崎彦弥太様は、竜岡町に、コートを一面造られ、庭球部員の為に、開放された。此のコート開きは、河手捨二氏、谷田友治氏の両長老指導のもとで和やかに行われた。尚このコートでは、当時有名

な、リチャード、原田武一の両選手を招き、部員の為に、模範試合を催したこともある。

庭球部員は、戦争末期までここを使用させていただいたので吾々にとっては染井コートと共に忘れ難いコートの一つである。

昭和十年に、倶楽部ハウスを現在の所に移転し、其処を中心として、テニスコートを七面新設した。これは東京都に於ける、区画整理案が染井倶楽部にも及び、都電車庫寄りの一部が道路に、又トラックや、テニスコートのある所が開放地に予定されたので、これ等の土地を、東山農事株式会社に返地する事となった為である。

其の後、都財政の関係その他の都合で、区画整理は、実行に至らず、有耶無耶になり、開放予定地は一時東山農事株式会社の、野球場となったが、その後再び三菱倶楽部が使用することとなった。

然し、戦争末期には食糧難甚しく、野球場やテニスコートの、存在を許されなくなり、運動場は農地として、社員の食糧生産の場に変った。

終戦後の昭和二十一年は食糧事情未だ困難であったにも拘らず、テニスコート七面と爆弾の為半壊の憂目に逢った倶楽部ハウスは、逸速く修復された。

然し、昭和二十一年末より独立経営となった、養和会は、その経営上止むを得ず一般より会員を募集することとなり、染井倶楽部は、三菱庭球人だけで独占することが出来なくなり現在に至って居るのである。

尚、昭和十六年には、高輪開東閣の日本家屋並に、この隣接土地を一般社員が利用出来る事となったので、ピンポン室、玉突場等を造ると共に、接待用テニスコート二面新設した。此のコート開きには物故せる庭球同好会々員の慰霊祭並に、追悼庭球試合を行った。

之等の施設は、凡て、三菱養和会の附属施設として、利用されていたが、昭和二十年五月二十七日の空襲によって凡てが廃墟と化してしまった。

二、関東関西戦

大正三年に三菱倶楽部が創設されたが、其の当時は、今の八重洲ビルの敷地内に、テニスコートと並んで、木造平家建の倶楽部ハウスがあった。小さいながら玉突場、談話室、柔剣道の道場もあったので、テニスの打合せは、大概この談話室を利用した。

此の時分は三菱合資会社、銀行部、鉱山部、造船部等と云われていた時代なので、テニスをする人も現在と比べ非常に少なかった。

大正四年にはたれ云うとなく関西方面への遠征話が持上った。

早速連絡を取った処、先方も心良く承諾して呉れたので翌大正五年九月に第一回関東関西戦を神戸で開催することとした。同時にその境界線を関ヶ原にする事にきめた。

大正五年九月関東遠征軍は谷田友治、上村琢磨両監督に引率され、満を持して、神戸に向ったが、試合当日は、不幸雨に祟られ、折角の試合も、中止のやむなきに至った。然し、関東関西戦は、これに依って完全に確立された。尚此懇親会に於て次回は東京、其次ぎは名古屋で開催する事も決り之れが慣例となって爾後の試合は三地方で行われる様になった。

本部庭球部も大正九年より、硬式庭球を採用する事にしたが、軟式庭球に愛着の念断ち難き人々も相当あったので、全部硬式庭球に切り替えるわけにも至らなかった。

然し、関西方面は、すでに大部分硬式を採用していたので大正十年に於ける第六回関東関西戦より、硬式にて、試合をしたいと関西方から話があったが、体制未だ整はざる関東軍にとっては到底これを受け入れることが出来なかった為、折衝の末ようやく話がまとまり、大正十一年度より必らず硬式でと云う約束のもとに大正十年度は軟式にて試合を行った。これが軟式で行う対抗試合の最後である。

大正十四年に至り、戸外運動部担当幹事荘田達弥氏の了解を得、倶楽部事務室とも打合せ、本部庭球経常費を以て、銀製カップを作り、関東、関西戦のカップとした。これはHIカップが動機となって生れたものである。

昭和十七年金属回収令の発令は、金銀製品に

も及び、昭和十九年倶楽部所有のカップ類と共にこのカップも供出してしまった。

毎日のラヂオは日本軍勝利の放送ばかりであった。然し食糧は日に日に不足し、交通は極度に制限され、対抗試合は全く不可能となったので、昭和十七年度を最後として、HIカップ戦並に関東関西戦共終末を告げた次第である。

三、HIカップ戦と庭球同好会

岩崎彦弥太様は大正十一年十月ロンドンに御外遊の砌三菱倶楽部庭球部に、銀製カップを寄贈されたので、戸外運動部担当幹事荘田達弥氏は直ちに打合会を行った。

同会合には庭球部、長老河手捨二氏、山岸慶之助氏、谷田友治氏、倶楽部総務部担当幹事小木横氏、其の他庭球部諸先輩並びに各社戸外運動部庭球委員等、総勢約四十名に及んだ。

荘田担当幹事からカップの披露があり、引続き打合会を開いた。

打合せ事項

一、カップの名称　HIロンドンカップとす。

二、カップの使途　全日本三菱硬式庭球シングルス試合を行い此優勝者に授与する。但本盃には氏名を彫刻刻銘を附与する。

三、試合の名称　HIロンドンカップ戦

四、試合の運営　三菱庭球同好会を設立し同会にて運営する。

五、同好会委員（荘田担当幹事より指名）

向井輝志、桑原芳雄、大瀧鉄太郎

六、HIロンドンカップ戦　第一回は大正十二年東京にて開催の事、同時に委員長は河手捨二氏と決定。

以上

三委員は同席上に於て、基金募集の相談をし、直ちに各自の帽子を持ち廻り席上を一周し、応分の寄附金をこの帽子の中に入れて貰った。

これは庭球同好会最初の基金である。

註　HIロンドンカップはその後単にHIカップというようになった。

其の後関係者は、数回会合打合せの上HIカップ庭球試合の規定を左の通り定めた。

HIカップ庭球試合規定

試合の種類

本試合は硬式庭球「シングル」とす。

参加資格

日本全国の三菱社員は何人も本試合に参加することを得。

予選試合区域

全国を左の七予選区域に分つ

一、北海道地方　北海道一円

二、関東地方　東京横浜及其附近（東北地方を含む）

三、中京地方　名古屋附近

四、京阪地方　京都大阪及其附近（北陸地方を含む）

五、神戸地方　神戸高砂及其附近（中国及四国を含む）

六、関門若地方　九州北部（筑豊地方を含む）

七、長崎地方　長崎、佐世保、唐津及其附近

試合委員

試合事務執行の為め各予選区域に委員一名以上試合挙行地に委員長一名を設く。委員は各四予選区域より選出し委員長は前任者の指名により交代す。

予選々手

予選々手は委員の定むる方法日時及場所に於て各区域毎に之を選出す。試合の方法によらずして直ちに予選々手を推薦するを許さず。関東中京、京阪及神戸地方の予選々手は必ず定例関東、関西対抗庭球試合に参加せざるべからず。

委員は優勝試合の二十日前迄に予選々手（各地方より一名、但し関東地方、京阪地方、神戸地方は二名）の氏名又は其有無を委員長に通知すべし。

予選々手が已むを得ざる事情により優勝試合に出場するを得ざる場合は棄権せるものと認む。

優勝試合

優勝試合は定例関東、関西対抗庭球試合の際

其場所に於て挙行す。
優勝試合の組合せは抽籤によるべく、試合は三「セット」とす、但し「ファイナル」は五「セット」のこと。
最優勝者は其年度の三菱社内の「チャンピオンシップ」を獲得し次回の試合迄本「カップ」を保有す。
「カップ」保管については保有者及其地方委員協同その責に任ず。

附　則

本試合は日本庭球協会所定の規則に依るものとす。

以　上

以上の規定が出来たので河手委員長より規定並同封の上大正十二年七月二十九日、三十日の両日染井コートに於て第一回HIカップ戦並に第八回関東関西戦を行う旨各地区毎に招請状を発送した。
大正十二年七月二十九日、三十日の連休を利用した第一回HIカップ戦は、河手委員長の下に、染井コートに於て全国より選抜された選手八名に依って関東関西戦と並行して行われた。

選手内訳

北海道地方　一名
関東地方　二名　樋原　覚、桑原芳雄
中京地方　一名
京阪地方　一名
神戸地方　一名
関門若地方　一名　岩永佩雨
長崎地方　一名

此の輝やける栄冠を獲得した最初の選手は、関門若地方より選出された岩永佩雨選手であった。
第一回HIカップ戦終了後、次回は神戸に於て、開催する事に決定したので、同好会委員は、之れに処する為め、数次打合せをなし、同好会規定を定め、同時に名簿を作製し今後に於けるHIカップ戦の運営に当る事とした。

庭球同好会規定

記

一、会　　費　本会は三菱庭球同好会と称す
一、会　　員　関東地方に於けるHIカップ並に関東、関西庭球試合出場者及左両試合の後援者中の有志の者
一、会　　費　毎月五拾銭の割
一、会費徴収期　毎年六月及十二月に其前半ケ年分を徴収す
一、会費の使途　HIカップ並に関東関西試合に要する費用中委員に於て適当と認むるものに限り支出する事を得
一、会費の払戻　一旦徴収せる会費は払戻をなさず
一、委　　員　当該年度HIカップ委員

以　上

爾後、回を重ねる事二十回、昭和十七年を最後として、関東、関西戦と共に、一応幕を閉じることとなった。

四、復活せるHIカップ戦と関東関西戦及自才トーナメント

連合軍総司令部に依って行われた財閥解体の大旋風は、三菱義和会をも四散せしめ、三菱各社の横の連絡は全く断たれた形となった。
然し昭和廿一年、染井コートの復活は、自然に同好会のメンバーを、染井コートに集め、同年七月早くも、戦後第一回の庭球懇親会を開くに至り、岩崎彦弥太様始め、出席者三十九名にも達した。
昭和廿一年末より独立経営となった義和会には続々外廓団体が入会する様になったので、自然に三菱の独占は許されなくなった。然し庭球同好会は此間四回程懇親会を催し、其の都度HIカップ戦並に関東関西戦復活の話が持上り、一日も早く之れが実現を祈った。
東京に於ける三菱専用コートの喪失は、自然に各社直属コートの設立を促し、銀行、金属鉱業、電機、其の他もそれぞれのコートを有する

様になった。

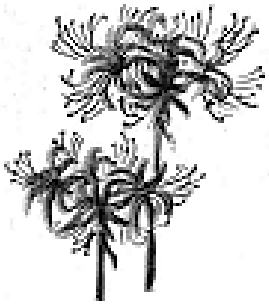
昭和廿六年に至り、我々の念願はようやく実現の緒に付き、昭和廿七年より、HIカップ戦並に関東関西戦を復活する事になった。此報に接した関西、中京、九州等各地の有志は双手を挙げて復活に賛意を表した。

復活第一回HIカップ戦・関東関西戦は昭和廿七年九月二十一東京千代田銀行（三菱銀行）武蔵野コートに於て行うこととし、同時に四十五才以上のダブルス百才トーナメントも新たに設け、戦前に増す庭球大懇親試合を挙行する運びとなった。

千代田銀行がこの催しの為三面のコートを五面に拡張して呉れた事に対し我々は深甚なる謝意を表する次第である。

伝統あるHIカップは関東関西戦カップと共に金属回収令に依って供出されたものとなっていたので岩崎様には復活HIカップ戦の為に新たにカップを寄贈して下さる事になった。石井委員は直ちに銀座の御木本に依頼し見事な銀製大カップを製作した。開催期日直前になって、旧HIカップは偶然にも、戦前最後の優勝者林新緑氏（中京）が戦火を受けたにもかかわらず、之れを保管して居る事が判明したので、新カップは岩崎様の貴意を得、百才トーナメントの優勝盃とする事にきめた理である。

昭和廿七年九月二十一日第一回復活庭球試合は、現地所会社会長石黒委員長の下に、天候にも恵まれ、千代田銀行コートに於て、予定通り開催され、和気靄々の内に滞りなく終了した。爾来復活大会は年々隆盛となり本年ここに復活十周年大会を迎える至った。

HI盃全三菱庭球試合は、三菱庭球人ばかりでなく、三菱関係者全部の横の繋りの基礎をなすものと思われる。我々はこの行事が年と共に盛んになる事を祈り且確信して居る次第である。

附記　昭和二十八年には、関東関西戦の為に有志の寄附金によって優勝旗を作製した。